

---

# ハッピィスマイル

チラリズム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハッピィスマイル

### 【著者名】

チラリズム

### 【あらすじ】

地球そのものである存在の少女の失った笑顔を見るためにピエロに姿を変えた1つの星が少女に笑顔の素晴らしさを伝えます。

人類は悲惨な歴史を残しています。

嘘を嘘で隠したり、自ら命をポイッと捨てたり……哀しみで人の心を染めていく日は近いはず。

我々は何をするべきか？ 裁かれるべきか？

でも。でもね。

いつか、この星が赤く染まろうとも笑顔だけは忘れないように……。

舞台は病室。そこで1人、ベッドに横たわり窓から見える黒い空を見上げている少女がいました。

少女の名前は青土縁【あおとみどり】。長い間ほつたらかしたのか、少女の白い髪は伸びに伸び……ベッドから床にまで届いています。

ところで、地球が苦しめば少女も苦しむことをご存知ですか？ 少女の病気は治りません、地球そのものが彼女なのです。

哀れな歴史という病に犯されている地球が存在する限り、少女にとっての世界は窓から見えるほんの僅かな景色だけ。

少女は悲しみ、時間とともに感情を無くしていました。

そんな時です。何も言わずに抱きしめてくれそうな夜空から、頬を優しく撫でるかのように涼しい風に乗る一つの星が少女のもとへ降りてきました。

星はピロロに姿を変えて、少女がいる病室の窓をノンノンと叩きました。

少女は不思議そうな顔で少しためらいながら窓を開けました。

「失礼しますお嬢さん」

「あなたは誰？」

体を捻らせながらピロロにとつてあまりに小さすぎた窓に悪戦苦闘、ようやく部屋に入ると……服をパンパンと叩いてからお辞儀をした。

「私の名前はアルトリューグ・ベリアスコングフロウ・ヴィオヴィス・マーショルグレスディーです」

「長いお名前」

「そうですね。私の親戚は空の彼方まで沢山いますから、カブらなりように名前が長いのです。私のことはリューグと呼んでください」

「はじめましてリューグ」

「はい、はじめまして……えーと」

「青土縁です」

「おやおや素晴らしい名前ですね、どうぞ宜しく」  
再びリューグはお辞儀をして、手を差し伸べます。  
握手がしたいようです。

『スポーツ!』

よくある手品を少女に披露したようです。

二人が握手を交わすとリューグの右手が取れてしまいました。

袖からホンモノの右手を出して、リューグは少女の反応を見ます。期待を胸に膨らませていたのも空しく、少女の反応はイマイチのようです。

「面白くなかったようですね、これは残念。自信があつたのに」少女は首を傾げます。

「どうしてこんなことをするの？ そんな顔ですね……説明しますよ。星たちを代表して私がアナタを笑顔にする使命を果たしに参りました」

「笑顔に？」

「そのとおり！ 空からアナタを見ていると、いつもいつも無表情の一<sup>ヒ</sup>点張り。見かねた我々が、笑顔の素晴らしさを伝えに参つた訳です」

「でも私、笑顔になりたくないわ。静かに過ごして早く病気を治したいの」

「<sup>ヒ</sup>のままでは病気は治りません、その病気が治る薬は笑顔なのですよ」

「本当<sup>ヒ</sup>？」

「はい」

「でも私、笑いたくない。そんな気分になれないの」

「<sup>ヒ</sup>安心を、私はそのために来たのです」

ヒラヒラと蝶が舞つよつて、リューグは踊りながら病室を飛び跳ねます。

そしてポケットからカカオのチョコレートを取り出して少女に渡しました。

「お近づきの品でありますから、甘くて美味しいのですよ。」

少女はチョコレートを受け取り、カリッと端の方をかじる。

「...ニガイ」

少女はリューグに騙されたようです。

卷之三

リューゲは口に手をあてて、してやつたりと満足そうに笑います。

「うわー、一匹が強力

「おや、これは速攻果のよ……失礼しました」

意気込むリューグに少女は口を開いた。

「本当に大丈夫？」

「おまかせを、私のレパートリーは数え切れないほどありますからね。幾千の愛の詩も知っていますし、生死をわけた旅の話なども…

- ■ ■ ■

「どれも笑える気がしないかも」

「そりや手厳しい」

「『J』みんなでこ」

病室が一瞬沈黙になる。しかしリューグはめげません。

「では、ソリはシンプルに……」

リューグは握り拳をパツと開くと、そこから顔を出したのは一本の  
ピンクの花。

その花を両手で包み込む。

再びパツと開くと花は2本現れた。

パチパチと拍手をする少女だが、リューグはまだまと首を横に振ります。

同じことを繰り返し、花は4本……8本と倍に増えていく。

すると今度は手で包み隠したままリューグは少女に尋ねた。

「次は何本だと思いますか？」

「16本？」

「そう、順番通りでいくなら次は16本ですが

バツと勢いよく両手を開くと、病室いっぱいに花が咲いた。

床や壁、少女が横たわるベッドの隅々まで。

「…………すごい」

「グシン……時は駆け足で待ってはくれない、花たちは余程早く咲きたかったんですね」

今度こそ笑顔が見れるハズ……しかし期待通りにはいきません。

拍手はしてくれるものの少女に笑顔はない。

リューグは地団太を踏んで悔しがります。

「つるさいー 病室では静かにしなさい！」

太った看護士の女性がリューグに怒鳴りつけた。

「うわああ、おつかない！」

リューグは体の全体をつかって驚きました。

そしてリューグに部屋の掃除を言いつけて看護士は大きな体を左右に揺らし歩き……部屋から出ていった。

「はじめて見ましたよ、看護士さんが居たんですね」

「あの人は私のことをずっと見守ってくれているオゾンさん、本当は優しい人よ」

少女がそう言つと、再び部屋にヒヨコッと顔を出す看護士のオゾン。

「縁ちゃんに余計なことするんじゃないよピロロ」

そう言つてサッサと顔を引っ込め、ズシズシと足音たてて去つていく。

リューグは離れていくオゾンに向かつてアッカンベーをした。

「クスッ」

リューグが待ちに待つた声が微かに聞こえた。

「ヒヤハツ！ 今笑いましたね！？」

「え……私、笑ったの？」

コクコクと必死に頷くリューグを見て少女は僅かな笑みを浮かべた。

「そう、それです！ 私はそれが見たかったんです……少しきこらないですが、これから自然と笑えるようになりますよ」

『ゴーンー ゴーンー』

壁に掛かつた時計が鳴る。

「あ……時間だ」

「つむむ、なんの時間ですか？」

「私が一周したら報せてくれるの、次の合図がくるまで眠らなきゃ」

「ほほり……つまり1日起きて1日眠ると。それでは私はここで帰ることにしましょうか」

「また来る?」

「もちろん。アナタの笑顔が見足りないので、まだまだ来ますから覚悟してくださいね」

「うん」

二人は堅い握手を交わした。

「いい夢を……」

「覚めない夢って無いのかな……」

少女が急にボソッと呟いた。

「ん?」

「ううん、何でもないよリューグ」

リューグは窓から片足を出しながら一度、少女の方を振り返る。

「本当に大丈夫ですか？ 外は真っ暗で怖いです、一緒に居ましょ  
うか？」

「慣れてるから大丈夫だよ、それに暗闇は大切な光の暖かさをくれ  
るから」

それを聞いたリューグは安心な顔で窓から身を乗り出してジャンプ。

「それでは～」

手を降る少女を見てリューグは風を纏い空の果てへ。  
星になつて戻つて行きました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5865b/>

---

ハッピスマイル

2010年10月26日06時08分発行